時評

コンクリートから建築文化へ

伊藤誠三

もう既に過去の事になってしまったが，鳩山前首相が「コンクリートから人へ」と声高に政見を打ち上げ，2009年9月16日，民主，社民，国民新三党の連立ながら，政権が交代した．直ちに前原国交相大臣が，八ッ場ダムの中止を現地で宣言し，文科省大臣は高等学校授業料の無料化を決定した．八ッ場ダム関係者の混乱が連日伝えられ，ダム自体の有用性の是非も新聞紙上で論じられた．驚いた事に，計画開始から50年近くたち，当初予算の過半を使いながら，未だ本体が着工できないで居ることを知った．　膨大な金額が補償等の名目でコンクリートではなく，「人へ」渡されていたわけだ．更に，計画の根拠となった治水の為の保水量算定資料がかなりいい加減であった事も発覚，その上，経年変化で戦後の伐採で荒れていた山林が，その後，植林した樹木の生長ですっかり保水能力を回復しているも明らかになった．もう誰が聞いてもこのダム工事が無駄である事が分かる．この事態に対する表現としては「無駄な工事はやめましょう」と言うのが普通の言い方だ．しかし，「コンクリートから‥‥」と気取った言い方をしたために，コンクリートに象徴される建設工事全体が槍玉に上ってしまった印象を受ける．それなのに肝心の土木建設関係者からこれと言う反論も出なかったのが不思議な気がした．

一体，建設工事費の中身は何か．工事費目を大きく分けると，材料費，加工費，諸経費に分類される．このうち，加工費，諸経費は「ひと」に関わる費用として，材料費はどうか．砂利，砂，セメント，鉄等，の基幹材料を見ても出荷元の詳細を見れば，これらも殆どが人件費だ．単純な話が，例えば，鉄鉱石は山にあるとき，無価値で眠っている．掘削，運搬，材料化，商品化の全てに人の手が加わって，鋼材としての価値を生み出す．「コンクリート」と例えられるもので人によらないものは何もない．「コンクリート」といえども「人」そのものなのだ．日本のインフラ整備はまだまだ不足の上，質が悪い．蜘蛛の巣のようになっている電線を見上げるたびに何とかならないかと思う．木柱をコンクリート柱に取り替えてみても殆ど意味がない．戦後，急激な復興，経済成長のために急造，乱造された施設は50年を経てもう早や寿命が来ている．高速道路，橋梁などの老朽化も指摘されるようになってきており，待った無しの修復工事も多い．必要な社会整備の為の建設工事はまだまだある．

「コンクリート」と悪者扱いされる背景に，一時，盛んに行われた公共投資が「ハコモノ」行政と揶揄された事があげられる．このような風潮から建築蔑視の傾向が生れたのではあるまいか．今更ここで建築は芸術であると主張するつもりはないが，少なくとも，その時代の土地の文化を象徴するものである筈だ．建築が文化資産として認められないのはなんとも情けない．国民知力のレベルの問題ではないだろうか．世界には町全体が世界遺産と認定されるほどの建築物で構成された都市がいくつもある．それらは強権を持つ絶対者が強い意志で建設されたものもあるが，戦争で破壊された過去の町並みを住民の総意で復元させたものもあり，それらは長い寿命を保ち続けている．日本の町並みはどうか．過去の景観を保存しようとしている地区の殆どは形骸化し，テーマパークと呼ばれるような観光施設化しているのが多い．建物保存の話題もしばしば起こるが，その時も常に「古きがゆえに尊とからず」の言葉を思い出す．

ローコストやスピードを極める時代は終わった．いまやハコモノを文化資産に高める意志と建設意欲が必要なのではあるまいか．最近，建物の長寿命化が叫ばれているが，建物の強度や耐久性のみに関心が向けられているように思われる．建築が工業化産物としか認識されていない証左ではなかろうか．

建物が長寿命を保つには，何より，所有者のみならず，公共の場を占めている以上，その土地の人々に愛されている事が必要だ．愛着を持たれてこそ健全に維持され，長寿を保つ努力がなされる．利用価値の衰えた建物でも，愛されているがゆえに，維持保存が呼びかけられる例もある．「愛着が持たれる建物とは」，それが現在の課題であろう．

私自身はといえば，「早く，安く，効率よく」の時代や環境に自分の設計生命の大半を費やしてしまった事に忸怩たる想いがある．建築を志した頃の，「建築は凍れる音楽」の理念はどこに消えてしまったか．こんな事を言っても，今の若い人には単なる繰り言にしか聞こえないのだろうかと思いながらも，猶，心の底から建築文化の復活を強く望んでいる．